

道標^{どうひょう}
(道しるべ)

道標とは、道を通る人の便宜のため、石や木などに方向・距離などを記し、路傍^{ろぼう}に立てた「道しるべ」のことです。現在の道路標識にあたるものです。車で移動することが多い現代においては、道路標識は目的地への案内として大変便利なものですが、自分の足だけをたよりに旅をした時代には、行く先々で出会う道標は旅人にとって心強く、安心できるものであったことでしょう。

道標が各地で設置されるようになったのは、今からおよそ300年前の江戸時代の終わり頃のことです。この頃には庶民も伊勢参りや西国・四国巡礼など、主に信仰の旅に出るようになりました。旅が盛んとなり、街道も整備され、石造の道標も数多く設置されるようになりました。しかし、一度旅立てば安否がつかめない時代であり、人々は死を覚悟して旅に出ました。

江戸時代の道標は、単なる道案内にとどまらず、旅の途中で災難に見舞われた人々に対する追悼や安全祈願の祈りが込められています。また、道標には地藏菩薩^{はっさつ}に刻まれたものも多く見られ、「道分け地藏」として信仰されている場合もあります。道標を建立する理由の一つに

は、地藏菩薩の迷える人々を正しい道（極楽）に導く修行に通じるとする信仰があったからだと考えられています。道案内をすることによって、自分自身も功德を積むことになり、極楽浄土へ行くことができると信じられていました。また、先祖供養や村の安全などを祈願したものもあり、江戸時代の道標は旅の案内と宗教性を合わせ持つものであったといえます。

こうした石の道標は、町内に約50カ所残されています。年代が判明する最古の道標は、奥地区にある「出合^{あひあ}の地藏さん」と呼ばれるもので、宝暦3年（1753年）に建てられたものです。高さ70cmほどの自然石の中央に、地藏菩薩が浮き彫りにされ、表面には「右むらなか道、左いせか（こ）うや道 利右衛門^{りえもん}」と刻まれ、伊勢・高野山参詣の道標であったことが分かります。

道標には、先人たちのさまざまな祈りや願いが込められています。身近に残る道標に目を向けてみてはいかがでしょうかでしょう。



町内最古の道標（出合の地藏さん）

広告 町収入の一部とするため有料広告を掲載しています。